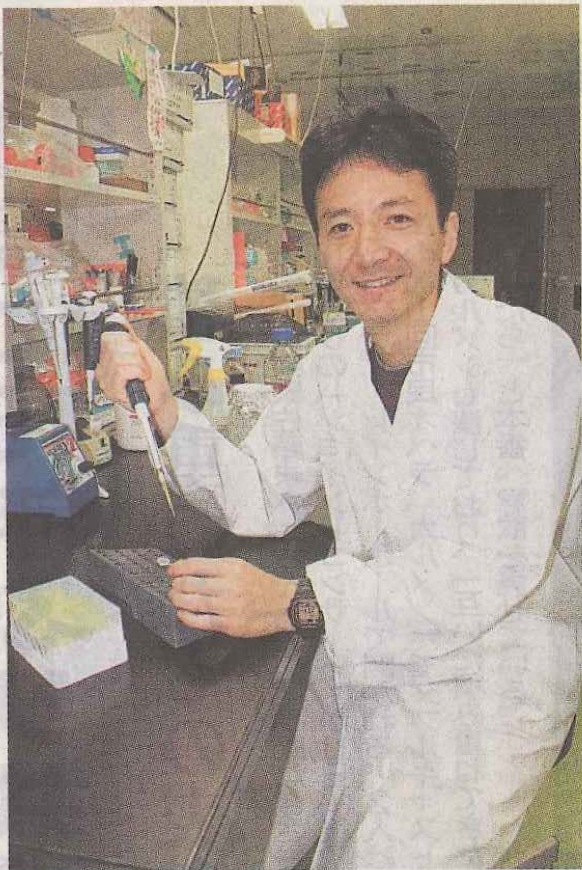


へパリンに下痢感染抑制

抗血液凝固薬 新薬開発に期待

帯広畜産大学原虫病研究センターの加藤健太郎特任准教授(40)らの研究グループは、抗血液凝固薬として使われる糖類の一種「へパリン」が、感染すると人や牛が下痢を引き起こすクリプトスポリジウム原虫の感染に阻害効果を持つことを発見した。有効な特效薬がない感染症のため、今後の新薬開発が期待される成果という。研究論文は1日付で英国の総合学術誌の電子版「サイエンティフィックレポート」に掲載された。



「新薬開発で畜産農家の生産性向上につなげたい」と話す加藤特任准教授

帯畜大 加藤准教授ら発見

クリプトスポリジウム原虫は、哺乳動物の腸などの消化器官に寄生して増殖する人獣共通感染症。栄養吸収を阻害することで下痢を引き起こす。

健康者は7〜14日で自然治癒するが、免疫力の弱いエイズ患者や子牛は重症化し、死に至ることもある。

加藤准教授によると、管内の牛にも感染例があるというが、法定伝染病と違い届け出の必要がないため、実態数は把握できないという。

研究は東大農学部との共同で3年前から着手。加藤准教授らは、これまでの研究でトキソプラズマ症やマラリアなど原虫を介した感染症は、原虫側のタンパク質が糖類に硫酸基の付いた特定の硫酸化多糖に吸着し体内に侵入することが分かっていた。

このため研究グループは、クリプトスポリジウム原虫に関する吸着する硫酸化多糖を調べるため、原虫と「へパリン」を含む

種類の硫酸化多糖を混合し、細胞に注入。その結果、「へパリン」が6〜9割と他と比べて高い感染阻害率を示した。

加藤准教授は「新たな特效薬の開発で、畜産農家にとって生産性の向上につながれば」と話している。

(高津祐也)